教育長だより　No. 27

２０２２年１２月１３日

忘れられない母親の言葉(懇談会にて)

『滋賀教育』という小さなちらしが時々届きます。これは滋賀県教育会が出されている広報誌です。この1ページ目の右下に「湖風」というコラムがあり、私は毎回この記事を楽しみにしています。日常の学校現場の忙しさの中で、私たちに教育の原点を「ふっと」考えさせてくれる内容です。その筆者は吉永幸司さん。（出身は滋賀県内の小中学校の先生。そして、京女の元教授で、附属小学校の校長として京都や滋賀の国語教育をリードして来られました。）

数年前、学校の研修がきっかけで、先生から『国語指導入門』という本をいただきました。その中から保護者懇談会にかかわる内容を一つ紹介します。（一部補足：西村）

私は（中学校３年間の厳しい経験から、小学校に異動してからは）子どものことをまず考えることが、よい授業ができる前提であることに気づくようにもなりました。こんなことで得意になっていた矢先、また、次のようなことが起こりました。

（小学校）三年生を担任していた時、とても忘れ物の多い子がいました。何とか忘れ物をなくしたいと注意したりしました。しかし、忘れ物は少しもなくなりません。

二学期の保護者会（懇談会）で、お母さんにその子の忘れ物について話しかけました。多少の記録も残していたので、いつ何を忘れたのかについても説明し、家庭での協力を促したつもりでした。

じっと下を向いて話を聞いておられたお母さんが、

「先生のおっしゃることはよくわかりました。ところで、忘れ物がなくなるように、あの子に対してどんな指導をしていただいたのでしょうか。」と、問い返されたのです。

唖然（あぜん）としました。なんという横着なお母さんだと思って腹立たしくも思いました。

しかし、冷静になって考えてみると、子どもができていないことを知りながら、注意をするだけで適切な指導をしなかったことを恥ずかしく思いました。それだけでなく、忘れ物をしているという事実を把握していることが、いかにも熱心に指導しているという思い違いをしていることに気づきました。

大切なことは、子どもが忘れ物をしないように適切な指導をすることだったのです。そして、忘れ物がなくなったら、そこで成長した姿を保護者に伝えることだったのです。

こんな簡単なことにどうして気づかなかったのだろうと恥ずかしく思いました。

子どもたちは、毎日、元気に学校へ通ってきます。しかし、明るく振舞っているような子どもたちも、それぞれにさまざまな悩みや課題を抱えていることにまで目を向けないと、本当の教育はできないことを知りました。

また、子どもたちの持つ悩みや課題を把握するだけでなく、それに応える指導がなくては、子どもが育つことに関われないことに気づきました。

子どもにとって何が大切かをまず考える。そして、子どもに近づくことを心に決めるようになった私の実践には、こんな子どもたちとの出会いがあったのです。